

葉山町立葉山小学校

研究テーマ：9年間を見通した探究的な学びの実現を目指して
～ 地域を大切にし、自ら関わり合い伝え合う子どもの姿 ～

1 実践の目的

本校では、令和7年度に向けて「9年間を見通した探究的な学び」の具現化を研究の中心に据えてきた。生活科・総合的な学習の時間を軸に、子どもが自ら問いを見出し、地域と関わりながら学びを深めていく姿の育成を目指している。

葉山地域には、人や自然など、多様で豊かな地域資源が数多く存在する。これらを生かし、子どもの探究活動をより確かなものにするとともに、地域への愛着や主体的な関わりを育てることを本実践の目的とした。また、教員が地域と協働して学びを創り出す力を高めることも重要なねらいとして位置付けた。

2 実践の内容

令和5年度から、探究的な学びの過程を意識した授業づくり、単元構成の改善に取り組み、ICTや掲示物を活用して子どもの思考を可視化しながら授業改善を進めてきた。

今年度は、子どもが探究的な学びを通して地域と関わり、さらに学びを深めていくため、次の2点に取り組んだ。

①「生活科・総合的な学習の時間」の9年間を見通した全体計画の作成

②地域コーディネーターの活用

①については、中学校と協議しながら、身に付けさせたい資質・能力と学習内容を見据えた9年間の全体計画の作成を行った。

②については、必要に応じて地域コーディネーターと連携し、地域の方へのインタ

ビューや体験活動、地域との関わりが自然に生まれる学習場面を多く設定し、学びがより主体的になるように意図した。以下に実践事例を紹介する。

第2学年 「町となかよし大きくせん」

児童が「自分たちの町をもっと知りたい」「地域の人と関わりたい」という思いをもって探究を進められるよう、前回の活動を丁寧に振り返ったり、新たに調べたいことを整理したりして、学習の見通しをもてるようにした。

学区探検活動では、地域の方々との対話を中心に学びを深められるよう、事前の質問づくりに丁寧に取り組んだ。活動後は体験を共有し合う時間を大切にし、気付きを交流することで、地域のよさや思いに触れられるようにした。さらに、自分たちにできることを考え表現する活動へとつなげ、実感を伴った学びに発展させた。教職員は、一人ひとりの興味や関心を受け止め、児童自身が学びの方向を見出せるよう支援した。こうした地域の方々との温かな交流を通し、児童が町を大切に思う心を育てていった。

第4学年 「100周年の葉山小をワンダフォーにしよう」

「葉山小をよりよくしよう!」という考えを明確にし、児童が自分自身を見つめ、改善策を立て、それに向かって実践・発信し続けるように単元を構成した。特に、発信の過程を充実させるためにゲストティーチャーを

招き、「誰に」「どんな工夫をして」「どのように伝えるのがよいか」などプレゼンテーションのコツを学ぶ機会を設けた。

単元全体を通して、自分の経験や失敗、成功のポイントを振り返り、友達と協力しながら、生活をよりよくするための提案・説明・共有を行えるようにした。

第6学年 「未来につなぐ楽校づくり」

3つのチームに分かれて進めたが、どのチームも共通して「未来の葉山小学校のために」という軸を大切にし、「何のために」「どんな効果があるのか」を常に問い続けながら取り組んだ。

【グッズづくりチーム】

PTAの「100周年記念手ぬぐい」の売れ行きからヒントを得るべく、副会長にインタビューを実施。「利益率」など経済面の話も聞き、自分たちがほしい物ではなく、「買ってもらえる物」をつくる意識へと変化した。葉山をモチーフにしたデザインのステッカーを企画し、デザイナーの保護者の方に協力をいただいた。

【楽校づくりチーム】

「普通教室」「STEAM教室」「体育館」の課題を整理し、望ましい空間について検討した。AI画像生成を活用し、思いが伝わる発表資料づくりを行った。「体育館が滑りやすい」という課題には実際に滑り止めを含むワックスを購入し、実践した。

【ビオトープチーム】

校内にあるビオトープの課題解決に向けて、かつて整備に携わった先生にインタビューを行い、水循環を妨げる水漏れが大きな課題であることに気づいた。続いて業務員に話を聞き、「止水塗料」の存在を知った。現在は、グッズチームの売り上げをもとに、葉山の職人にアドバイスをいただきつつ、

さらなる改善に向け取り組んでいる。

3 実践の成果と課題

子どもたちは、地域の人との交流を通して学習が深まり、学んだことを生活や地域と結び付けて考えようとする姿が見られるようになった。教職員も、地域資源の活用に対する関心の高まりや、地域コーディネーターと協働することの意義の実感が増えたことが、アンケート結果から明らかになった。

一方で、地域との連携を継続的・計画的に行う体制は課題として残った。また、教員自身が地域へ積極的に発信し、協働を促す力を高めていく必要性も明らかとなり、地域と学校の双方が学び合う関係づくりに向けた工夫が求められる。



4 今後の展開

今後は、地域資源に関する情報や協働可能な人材を整理し、年間を通して計画的に連携できる体制を整えていく。また、地域コーディネーターとの定期的な打合せを行い、活動内容の共有と協働の質の向上を図る。さらに、子どもが地域に向けて学びを発信する機会を設け、地域に広がった学びが再び学校に還元される循環をつくり、探究的な学びを一層深めていく。

これらを通して、地域を大切にし、自ら関わり、思いを伝え合う子どもたちの育成を継続して推進していきたい。

